

朗 読 文

干潟ひがたといえ、潮干狩りや渡り鳥の休憩地を思い浮かべる人が多いだろう。干潟とは、河口や浜辺で潮が引いたときに姿を現し、潮が満ちたときは水面下に隠れる砂や泥。潮の満ち引きの差が大きい太平洋側の、激しい波に洗われにくい内湾に多い。

ただの砂や泥と思っている人もいるだろうが、干潟に住む小さな生物たちは微妙で豊かな生態系を作っている。その営みが作り出す浄化機能などの働きは、到底、今の科学では真似できない。干潟には、人が暮らす陸から、色々な「汚れ」が川の水や排水に含まれ流されてくる。「汚れ」と括弧をつけるのは、動植物の死がいのような固形物（有機物）や、水に解けた窒素やリンなど（栄養塩）は、決して役に立たないものばかりではなく、ある種の生物には、なくてはならないものだからだ。

例えば、栄養塩は干潟とその周辺に生息するヨシや海草類、植物プランクトンなどの成長に欠かせない。動植物の死がいや排泄物は、カニや貝類、ゴカイなど底生生物のえさになる。これが浄化機能の原動力だ。

「汚れ」を干潟はどれぐらいきれいにできるのか。水産庁中央水産研究所などが愛知県の一色干潟で一九八〇年代に調べたところ、流れ込む窒素とリンの約半分を取り込んでいたという結果が出た。干潟は、まさに天然の下水処理施設といえる。人間の作った下水処理場は有機物がある程度は除去できるが、栄養塩をこれほどまでに取り除くのは難しい。同じ能力を持つ施設を作るとしたら、莫大な費用がかかるはずだ。

栄養塩を取り込んだ植物プランクトンや海草類は、底生生物や魚が食べて消費する。底生生物や魚が死ねば、死がいや排泄物はバクテリアが分解して栄養塩に戻す。干潟は、こうした生命の循環を繰り返している。

人間や鳥が、魚や貝、カニなどを採って食べることも、干潟を守ることにつながる大切な行為だ。陸から海に運ばれてきた有機物や栄養塩を、陸に戻し、干潟の処理能力を超えるほど「汚れ」がたまるのを防ぐからだ。夏に発生しやすく、魚介類に大きな被害をもたらす赤潮は、植物プランクトンが大発生して起きる現象だ。干潟の底生生物が豊富だと、こうしたプランクトンが過剰になることはない。

干潟は、浅瀬の藻が生えた場所とともに、稚魚や稚貝の産卵、成長の場でもある。有明海やかつての瀬戸内海、三河湾などはいずれも魚がよく採れる豊かな海だったが、これも干潟や藻場が十分にあったからだ。干潟は海のゆりかごともいえる存在だ。

干潟の生き物といえ、シギやチドリ、カモなどの渡り鳥が思い浮かぶ。シベリアとオーストラリアなどを行き来する渡り鳥は、藤前干潟ふじまへなど日本の干潟で栄養を補給して飛び立っていく。けれど、えさが満足になければ飛んではこない。

渡り鳥が多いうちは豊かな生態系が保たれている証拠ともいえるだろう。